


 労協連だより

古村 伸宏

早いもので、「暑い、暑い」と声を発する毎日が、もう9月に近づいた。今夏は、ロンドンオリンピックに一喜一憂したり、夏の甲子園での奪三振記録に驚愕しながらも、どこかすっきりしない毎日を過ごした。オリンピックでは、史上最多のメダル獲得だと騒がれたが、金メダルの獲得数は伸び悩み、柔道界がそのA級戦犯の扱いを受けている。金メダルが減ってしまい、これって「1番じゃなきゃダメなんですか？」で話題になった事業仕分けの影響とってしまうのは、私だけだろうか。また、全体として女性陣の活躍が目立ち、長い努力の上に開花した愛ちゃんや寺川綾さんに感動した私は、それでも「世の中捨てたもんじゃない」と思えない、暗澹たる気持ちに支配された夏だった。

その原因は、はっきり政治にある。そして、政治の劣化が、竹島や尖閣諸島の問題や、いじめの問題といった生活や国の在り方全般に影を落とし、覆ってしまっている。そして、震災復興が語られる場面は激減し、原発反対のうねりに反し、着々と再稼働のルールが敷かれ、沖縄の基地から米軍の問題は、結局何も変えられないままの事態。日常の暮らしは震災を忘れたかのようにもある。この国とその国民の有り様を前にして、これほどまでに五感が鈍り、想像力を欠如させてしまった種族の未来はどうになってしまうのか。もっと感情を込め、熱を帯びて、日々の生き様をみんなが見直すべきではないの

か。でないと、支配の誘惑に乗り、社会が転がり落ちてしまう危険が迫っている。協同労働の運動も、理論と理念を超えた、感情や本能、そして深層の真理を体現し明示することを意識する必要がある。

この秋は、「全国よい仕事研究交流会」、盛岡・埼玉での「いま、『協同』が創る全国集会」、そして「全国代表者会議」と共に開催する「労協連ICA加盟20周年」&「センター事業団設立25周年」記念レセプションと、積み重ねてきた歴史とこれから積み重ねる歴史を意識化するイベントが続く。6月の総会・総代会で確認した「10か年総合戦略」「中期3か年計画」の先行きを占う秋である。地域や社会の困難や矛盾に真正面から立ち向かい、仕事おこしと社会連帯活動でその解決を図ろうとする機運は、全国で高まっている。しかし、それを本物にし普遍化するためには、今一度組織を見直し、改革していく必要性も高まっている。30年の歴史的集大成として、「全組合員経営の完全実現」と「社会連帯経営への挑戦」とを同時並行で進める改革になる。この経営力を、まちづくり・地域再生・市民自治の礎にしていくことが、協同労働運動の大きな使命となる時代である。また、「働く」を作り直すうえで、自立就労支援の取組みが広がる中、中間的就労を超える「コミュニティ就労」の場を、地域に圧倒的に作り広げることが求められている。秋に向かって暑さは内発的に高まりそうだ。